

東大の本郷キャンパスの正門を左折してすぐのところにあつたブロンズ像が立っている。ひとつは鹿鳴館を設計した建築家で東大の造家学科の外国人教師であるジョサイア・コンドル。もうひとつは初代の土木学会の会長であり、日本の土木工学の創設者である古市公威。ふた

りとも日本の建設界になした貢献は計りることができない。対する古市工科大学校長は年老いて見え、杖を手に持ち、いすに深々と座って動きがない。像全体は威厳に満ちているが、重厚であり、華やかさからはほど遠い。背後には衝立状の石壁が立ち上がり、さらにその後ろにはうっそうと樹木が茂っている。

しかし——これほど対照的に見えるふたりの像が実は熱い共通点で結ばれているというところをここで言いたいのである。一八七七年一月二十八日、コンドルは三か月に及ぶ長い船旅の末、横浜の港へ到着した。二十四歳だった。イギリスでソーン賞という建築賞を受賞していたとはいえ、実作がまったくない若き建築家の卵にとって、不安な上陸だったに違

ふたりの銅像

西村幸夫

Nishimura Yukio

東京大学先端科学技術研究センター教授



知れない。ところが、このふたつの像の姿はあまりに対照的である。コンドル先生は台座の上に姿勢良く葉巻を持って華麗に立ち、中年にさしかかっている年齢好ではあるが、若々しく、動きを感じさせる姿をしている。まわりに銅像を遮るものはなく、四方からこの英国人建築家の立ち姿を見

ることができ、対する古市工科大学校長は年老いて見え、杖を手に持ち、いすに深々と座って動きがない。像全体は威厳に満ちているが、重厚であり、華やかさからはほど遠い。背後には衝立状の石壁が立ち上がり、さらにその後ろにはうっそうと樹木が茂っている。

一方の古市はというと、コンドル来日当時はパリのエコール・サントラルに入學し、土木工学を勉強中の二十二歳の学徒だった。古市が横浜の港へ戻ってくるのは一八八〇年十二月十一日のことである。彼の四年に及ぶ滞仏中の逸話として、休みの日も勉強を続ける古市に下宿先のホテルの人間が休日ぐらい休養したらどうかと水を向けたところ、私が一日休むと日本の土木が一日遅れる、と答えたという話がある。若い国の将来と自分の将来とを重ねる熱い想いがあつたのだ。

日本は若く、貧しく、知識に飢えていた。しかし貢献するに値する国だと彼らは思った。ふたりが共有する若き想いのたけをこの像の前を通るたびに思い起こすのである。